ヒュー・マクミラン医療センターが開発

・身体障害児のための遊園地・

身体障害児のための遊園地がオンタリオ州トロントに完成し、健全な子供たちに混じって、車椅子や歩行器、あるいは担架に乗った子どもたちが歓声をあげながら遊んでいる。

身体障害児のための特別リハビリテーション施設として世界的に知られているヒュー・マクミラン医療センターが開発して、昨夏同センターが運営する学校に設置したもので、「楽しみながらリハビリテーションができる」として大好評。

子どもたちは、まず直線またはカーブしたいくつかの傾斜路から、三角形のウレタンが林立する鬼ごっこ広場へ入る。そこから前後左右に揺れるスイング・ブリッジと車椅子に乗ったまま上下に動く吊り橋を渡ると、大きな柳の木があって、その周囲に材木とプラスチックで作った運動場が広がる。運動場にはさまざまな滑り台あり、よじ登り用ロープやジャングルジムあり、はしごやタイヤで作った壁ありで、一見、普通の遊園地と変わらない。

ただ、例えば滑り台は“軟着陸”できるようになっているとか、斜面は車椅子が通りやすいようにアスファルト敷きになっている、車椅子に乗ったままブランコがこげるように引っ張るためのロープがついている——などの工夫がなされている。

子供たちは、車椅子に乗ったまま自力でブランコや橋を揺らしたり、上からつるした棒につかまりながら“橋”を渡る。いつも車椅子に束縛されて、動き回る機会の少ない障害児にとって、体を自由に動かせることほど大きな喜びはない。腕や体を思い切り伸ばし、階段を登り降りすることによって、日頃は使わない筋肉を強化できるのもいい。また触知力をつける必要のある子供用にさまざまなドアやノブが、握力を強化する必要のある子供用に消防士のすべり棒などがつけられている。

最も人気のあるのは、壁につけた自動車のハンドルで、その前にはバスの“運転手”になりたいという子供たちが列をなしていることが多い。

校長のボースウィック氏によると、いずれは車椅子に乗ったまま遊べる砂場なども作りたいという。

遊園地は9歳以上の子どもたちを念頭に設計されたが、もっと小さい子供たちも遊び回っている。

「だめだと言えば言うほど、やりたくなる。身障者であろうとなかろうと、それが子供というものです」、とはボースウィック氏の弁だ。

この遊園地を考案したのは、ヒュー・マクミラン医療センター学校の教師テリー・クーサードさんとセラピスト（療法士）のグレッチェン・スキドモアさん。それを児童用遊園地を専門的に手がけているチルドレン・プレイグラウンド社（オンタリオ州ユニオンビル）が協力して建設した。費用の43,000ドル（約430万円）は、全額篤志家の寄付でまかなった。

ヒュー・マクミラン医療センターは、1962年、サリドマイド児およびその他の障害児の治療と教育のために開設された。いまでは106のベッドをもつ病院と学校を擁し、年間4,000人以上の外来患者を診察、治療あるいは訓練している。

センターではまた、障害児リハビリテーションのための技術開発、あるいはその応用にも力を入れている。

例えば、脳性麻痺児の新陳代謝をモニターするのを助ける特殊ヘルメット、障害児によるマイクロコンピューター利用を図るソフトウェア、障害児用の防御ヘルメットなどが、現在開発中だ。また、これまでセンターの研究陣が開発に参加し、実用化されたものとしては、電気機械式の人工肘や人工手、人工前腕などがある。

ヒュー・マクミラン医療センターの住所は、The Hugh MacMillan Medical Centre, 350 Rumsey Road, Toronto, Ontario. Tel.(416)425-6220.